

第41回

うつのみやこども賞だより

令和6(2024)年度 4回

市内5・6年生の選定委員さんたちが、月に4冊の本を読んで、年間で一番友達にすすめたい本に「うつのみやこども賞」を贈っています。

《今月選ばれた本》

『インサイド この壁の向こうへ』

佐藤 まどか／作 スカイエマ／絵 (静山社)



令和6年9月8日

～読んだ本の感想より～

- 立場や身分のちがう6人が協力して、自分たちの世界を自分たちで変えていく姿がかっこいいなと思いました。物語の終わりの先で、6人が何をしていた、どういう生活をしているのか気になりました。すごくおもしろかったです。
- とある施設に集められた6人の少年少女たち。階級差別が激しいその国で、住んでいた場所も階級も違うけれど、だんだん心が通じ合っていくところがすごくよかったです。
- キトーの抱える階級社会による格差は、現代の世界にも通じる場所があると思った。また、1人1人の心情が自分とも重なるところがあった。
- 階級世界は大変だと思った。みんなが素直じゃないのでまとまらないけれど、仲よくしたら、良い友達になれたと思う。
- 階級制度がある国で、主人公たちがそれぞれの事情を抱えながら支えあっていくところがすてきだった。最後には、みんなが仲よくなっているところもよかった。

『波あとが白く輝いている』 蒼沼 洋人／著 (講談社)

- 七海にふりそそぐ、つらさの数々を全て乗り越えていて、すごいなと思いました。
- 七海が同学年の子たちと、海光祭というイベントをひらこうとしていくところが感動しました。
- 主人公の勇かんところや、自分にも共感できる場所があって、とてもよかったです。自分から良いと思うところを思い切って言ってみると、実現できるということが勉強になりました。
- しん災でたくさんの人を亡くしたけれど、「復活させよう」とがんばっている七海がとてもかっこよかった。
- 汐里さんがいなくなって相談できる相手が少ない中、「先生」「おじいちゃん」「友達」などと協力し、海光祭を成功させるところが、とても感動した。

『あしたの笑顔』 横田 明子／作 (あかね書房)

- アンジェルマン症候群がある姉のほのかの障がいを広めてしまうということは、とてもひどいことだと思った。
- アンジェルマン症候群はとても大変な障がいですが、ずっと笑顔でいられるのは、すてきななと思いました。
- ほのか(姉)が少し変わっているとも思ったけれど、「そんなお姉ちゃんには要らない」なんて言われたら、腹がたつ気持ちも分かる。さやか(妹)が色々なことをがまんしていると聞くと、かわいそうだと思った。
- 「アンジェルマン症候群」という未知の大変な障がいと戦うほのかちゃんも、ほのかちゃんをやさしく支えあう家族がとてもすてきでした。
- 障がいのある姉を誇らしく思っていたさやかだけど、だんだん周りのことが分かって、そんな中で考え、また姉のことを誇らしく思えるようになっていけて良かった。

『ラナと竜の方舟』 新藤 悦子／作 (理論社)

- 存在しない町を想像したりするのが楽しかった。実際に竜に乗ってみたいと思った。
- ラナが、ジャミルの乗る竜がジャミルのおばあちゃんのところに行けるようにがんばっていたのが心に残った。
- マジュヌーンは長く生きていても子どもと話したいことがあるんだなと思いました。